



旧官幣大社・安房國一之宮 安房神社

鎮座地・館山市大神宮字宮ノ谷五八九
(通称・大神宮様)

祭神

上の宮

天太玉命 あめのみたまのみこと 「日本産業総祖神」

天比理刀咩命 あめのひりとめのみこと 「相殿、后神」

下の宮

天富命 あめのとみのみこと 「房総開拓神」

天忍日命 あめのおしひのみこと 「日本武道祖神」



- 例祭日：八月十日
- 鳥居：神明鳥居
- 本殿：神明造
- 社紋：十六葉菊花紋
- 宮司：岡嶋千暁
- 氏子数：百七十戸
- 境内坪数：一万六千四百十四坪
- 社号碑：元帥東郷平八郎書なる石碑、昭和八年建立

由緒

安房神社は安房国一之宮で、天太玉命を祭神としています。古語拾遺などによれば、安房神社の始まりは二千六百年あまり前に遡り、忌部一族による安房開拓神話に登場する安房忌部氏の祖・天富命が、その祖神を祀ったものとされています。

境内地からは古墳時代の祭祀用土器が出土しており、古代祭祀の地に神社が建てられたことがわかります。

また、境内にある海食洞窟遺跡からは人骨や土器が発掘され、県指定史跡になっています。

文武天皇時代（六九七〜七〇〇年頃）、朝廷の崇敬の篤い神社から特に名高い由緒ある神社のある郡だけを「神郡」として全国でわずか七郡だけが認められました。その一つが「安房神社」が鎮座する安房国安房郡です。

平安時代の大同元年（八〇六年）にはすでに百戸の封戸を有しており、延長五年（九二七年）の「延喜式神名帳」には式内大社・安房坐・アワニマス（神社）と記されています。

祭事

安房神社では一月一日の歳旦祭から十二月三十一日の除夜祭まで年間で二十七もの神事が奉行されます。主なものは、一月の「神田祭」、「置炭神事」、「粥占神事」、五月に行われる「御田植祭」、六月と十一月の「大祓祭」、八月十日の例祭（浜降祭、磯出の神事とも呼ばれる）、九月の「安房国司祭」、十一月には「新穀感謝祭」、そして十二月の「神狩祭」などです。また、神社庁からの「幣帛供進使」など官幣大社ならではの神事も執り行われています。

例祭

毎年八月十日の例祭は、古くは「浜降祭」とも「磯出の神事」とも呼ばれ、天富命の房総開拓がなると各地の忌部族が毎年相浜に会って当社に参拝した故事に由来するといわれています。

この例祭には、かつては洲宮、布良崎、相浜、熊野（佐野）、犬石、八坂（中里）、日吉（神余）、下立松原、浅間、三島、神明（白浜）の各神社が入祭しました。

御旅所への遷幸の行列は薙刀、鉄砲、台笠、立笠、草履取、挟箱、大鳥毛、鞆鼓、大榊、猿田彦、宮司、氏子総代、神輿という、氏子と十萬石の大名の格式をもった壮大なもので、「夕日の祭典」とも称されていました。

安房国司祭出祭

例年九月十四・十五日（近年は敬老の日の前の土日）に鶴谷八幡宮での安房国司祭は、安房神社にとっても大きな神事です。この神事は、古史料によるとおよそ千年前の延久年間が始まったとされ、その名前を変えながらも連続と現代まで続いています。

安房国司祭出祭には近隣の佐野、犬石、中里、竜岡、松岡から担ぎ手が参加します。出発日の早朝「しゅく」と呼ばれる足馴しを二の鳥居から一の鳥居まで佐野、犬石、中里の順に3往復行う慣わしがあります。

その後鶴谷八幡宮へ向け出発。途中の新宿神明神社に立ち寄り奉幣祭が執り行われます。これは、この辺がまだ入江だった昔、南三社（安房神社、洲宮神社、下立松原神社）の神輿が、新宿の御船に乗って渡御したという故事にならった神事です。

鶴谷八幡宮入祭時には、夫婦神を祀っている洲宮神社と一緒に入祭し、その喜びを共にします。鶴谷八幡宮には「安房神社遥拝殿」という特別な「御旅所」が設けられており、安房国一之宮ならではの格式が保たれています。



上：例祭での神輿渡御 下：境内にある御旅所

安房神社神輿の担ぎ手の衣装は、白以外の色物は使用しません。また、神輿を担ぐ時の掛け声は「おとーい、おとーい」ですが、これは「おー、尊い」が語源だとされています。その掛け声に併せて「さいいに採む」ことが伝統となっています。



このパンフレットは、地域の方々からの聞き取りを中心に、さまざまな文献・史料からの情報を加えて編集しています。内容等につきましてご指摘やご意見等ございましたら、ぜひご連絡いただき、ご教示賜りたくお願いいたします。



厳格に執り行われる神事